
炎を灯す少年と黒衣を身に纏う少年

みい + 仮面 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎を灯す少年と黒衣を身に纏う少年

【Nコード】

N3643P

【作者名】

みい+仮面3

【あらすじ】

並盛町のツナ、空座町の一護達はそれぞれの戦いに備えて修行をしていた。そんなある日の朝…なんと、一護達は空座町ではなく並盛町に！？何で見知らぬ町に！？一護達はどっちなっちゃうの！？ツナ達の反応は！

これは『BLEACH』と『家庭教師ヒットマンREBORN』のクロスオーバー小説です。コレはユーザー登録をしていない方でも感想を書けるようにしています。ただ、オリジナル要素が強く、時

間軸もバラバラなので、それに関しての中傷的な文章は止めてください。
とある事情により更新停滞中。

『1/アリエナイMeet』（前書き）

コレは友達のみいと仮面3の合作的な物です。みいが原文、自分が手直しをしています。

『1 / アリエナイ Meet』

マフィア——米国その他の国の大都市に暗躍する犯罪組織。

死神（死に神）——人を死に誘うという神。

本来はこう部類されるこの二つ。しかしこの世には、住民の自警団
として働くマフィアや、輪廻の輪を廻る魂魄の監視者——【調節者^{balancer}】
を生業とする死神が存在するのだ。

死を運ぶ筈のマフィアが生を護る。

生を乱獲する狂狩神は世界の廻転を護る。

この物語は、本来とは違う二つの組織が、本来交わらない筈の二つ
が交わってしまった物語である…………。

*

読者の皆様方は、【ボンゴレファミリー】を御存知だろうか？ボン
ゴレファミリーとは——伝統・格式・規模・勢力すべてにおいて別

格といわれるイタリアの最大手マフィアグループ。キャバッローネファミリーなど個々でも強大な組織を同盟とし、ネロファミリーやベッチオファミリーなど10000近い組織を傘下に置く。前身は市民を守る自警団であるため、ファミリーや地域住民を大切にすることが強い……と、皆様方が認知するマフィアとは雰囲気が違う物だろう。このボンゴレファミリーの十代目、つまりボンゴレ？世^{デーチモ}こと沢田綱吉。中学二年生。勉強、運動、運、全てが最低ランク。そしてヘタレと、悲しいまでダメ人間の称号を持つ彼だが、とある赤ん坊と出会ったことにより人生が大きく変わった。この物語の主人公の一人である。始まりは彼の朝から始まる。

*

ここは綱吉ことツナや赤ん坊でありながらツナの家庭教師であるリボーン達が住む並盛町。綱吉の1日は過激に始まる。黒いスーツでキメ、頭の帽子にはペットのカメレオンの「レオン」を乗せているリボーンが、ベッドで睡夢に浸っている綱吉の顎を強く蹴った。

「起きろ、ツナ！」

ゴンツツツ

鈍い音を上げ、綱吉掛け布団をはねのけ飛び起きた。顎にはジンジンする痛みが走り、既に少し赤くなっている。

「いってえ（泣）何すんだよ、リボーン！！」

「百蘭を倒すために今日も特訓するぞ！」

ニヤリと、家庭教師兼世界最強の殺し屋^{キルマン}が笑った。顔は赤ん坊で可愛らしいが、彼の恐ろしさを知る綱吉は恐怖におののいた。だがここで気敗けしたらリボーンの思うつぼ。今朝は反論を試みた。

「んだからって…今まだ朝の4時だぞ！？（汗）」

「それがなんだ！！」

ゴンツツ

再度、痛々しい音が部屋に響いた。そして虚しい自分の悲鳴も。

「んなっ！？（涙）」

「文句をこれ以上言うとな更に死に近づくぞ。」

リボーンはどこからか、黒光りし、先の方から殺傷能力満点の物を撃ちだす道具を取り出し、綱吉の頭に突き付けた。コレは一般常識では凶器とされかなり危険な物なので、この作品を見ているよい子のみなさん、悪い子のみなさん、真似しないように。

「わ、わかったよ（汗）」

綱吉は怯えなが急いで支度をする。モタモタしていたら本当に発砲するだろう。リボーンならやりかねい。

綱吉にとってのいつもの朝がやってきた。だが、？いつもの？はここまで。まだ綱吉達はこれから起こるとんでもないことをこのときは砂時計の砂のように、微塵も思っていないかった。

＊

黒崎一護——高校一年生。運動神経抜群、成績は中の上、喧嘩も強いし、ルックスも悪くない。この綱吉とは真逆と言える少年は？霊感？が強く、霊視が出来る以外は普通の高校生だった。彼の運命もまた、ある一人の？死神？と出会ったことによって大きく変わったのであった。

＊

綱吉がりボーンに凶器を突き付けられている頃、一護達がいる【ソウル尸魂界】では……

「起きろ、一護！」

「グハッ… なっ… ルキア！！てめー、何しやがる！！（汗）」

ここにもまた、荒々しい起こし方で睡夢の世界から呼び戻された悲しい少年がいた。オレンジ頭の少年は黒崎一護。先程記載した少年である。彼は、彼の運命を大きく変えた人物である朽木ルキアに呼ばれ尸魂界に来ていたのだが、断界と呼ばれる現世と尸魂界の間を走り抜けてきたのだ。最初に尸魂界に訪れた時よりも体力などは上がっているのだが、【拘流】やら【拘突】やらと、断界は何かと心臓に悪い物が多い為、心労がたかって一護は尸魂界に着くなり仮眠をとっていたのだ。そこへ、一護を尸魂界に呼んだ張本人に見つかってしまい今に至る。

「藍染を倒すために冬の決戦までに修行しなくてはならんだろう！」

「わあってるって！」

「では、なぜまだ布団から出てこない！？」

「さみいからだよ（怒）」

ごもつとも。疲れにプラスアルファで寒さときたもんだ。ちなみに尸魂界も冷え込む季節です。

「弱音を吐くな！」

——ガバツ！

とゆうか、そもそもルキアが呼ばずに一護と同伴で尸魂界にこればよかったと思うが……。死神代行である一護は正式なルートは使えない。しかし正式な死神であるルキアが地獄蝶を持ち同伴すれば、あるいは……。などと頭に考えが浮かぶ一護を尻目にルキアは、一護が包まっていた布団を剥ぎ取る。

「なっ！？」

「奇妙な霊圧がある！さっさと退治しに行くぞ！」

修行と言いながら、ちゃっかり自分の仕事を手伝わせる小柄な死神に憤りを感じながらも、一護は空返事で立ち上がった。

「わあったよ！」

＊

そして一護達は奇妙な霊圧を放っている所に。詳しく言えば奇妙な霊圧を放つ存在を搜索していた。

「ルキア、敵はどこだ!？」

「このあたりなんだが…」

辺りをルキアと共にキョロキョロと確認する。その時、一護の幾つもの戦闘で培ってきた感が働き、背中に悪寒が走った。コレは殺意を籠めた一撃――

「!?!?あぶねえ!?!?!」

ドゴーーーーンツツツ

・
・
・

「大丈夫か!?!ルキア!?!」

「ああ…。すまぬ。一護。油断した私が悪かった。」

間一髪。攻撃をルキア共々避けた一護だったが、何かが引つ掛かった。あの力は……？

「いや…つかさっきの技は…！？」

「ああ…妙だ…さっき我々がつけかけた技は斬魄刀によるものではない。」

「斬魄刀じゃないって…鬼道か！？」

「いや…さっきのは鬼道でもない。とすると、一体…」

鬼道——。それは死神が霊力を駆使して放つ呪術全般のこと。鬼道には色々な種類があるのだが、今のはどれにも当てはまらない。

「おい、お前は誰だ？ボンゴレ10代目はどこにいる！？」

模索する一護達に、何者かが呼び掛けた。見ると紫色の髪の長い小柄男が足から赤い炎のような物を出しながら空中に浮かんでいた。身長はルキアと同じか、大きい位か。見ると鋭利な刃を光らせる大鎌を持っている。大鎌の刃からは赤い炎が出ていた。

「ボンゴレ10代目…？ルキア、そんなやついたか？」
まったく聞いたことの無い単語に、首を傾げた。

「いや…聞いたこともない名だ…」

ルキアは聞いたことが無いらしい。果たしてボンゴレ十代目とは？

「おい、聞ってるぞ！ボンゴレさんはどこだ？」

男が言った。

「しらねーな、そんなやつ！お前こそ誰だ！？」

一護が礼儀のなっていない男に怒鳴り返した。

「俺様は野猿様だ！ボンゴレをわかんねーんじやおまえらに用事はねえっ！」

野猿と名乗った男は大鎌を振りかざし、一護達に飛び掛かってきた。しかし、死神にこそ死刑鎌が似合うだろうに……なんと皮肉な光景だ。

『1/アリエナイMeet』（後書き）

何故か尸魂界に野猿が…？理由はみいがちゃんと考えてれば掲載出来ると思います。

『2ノミシラヌCity』（前書き）

今回は仮面3の編集ミスで短いです。読者の皆様方、みい、ごめんなさい。

『2/ミシラヌCity』

紫色の髪の長い男の野猿という敵と一護達は激しい戦いを繰り広げていた。

野猿は斬魄刀を、鬼道を使わないイレギュラーな存在ゆえ一護達にとつてとても苦戦する相手だった。

一方綱吉達がいる並盛町では……

「ツナ！」

「ん！？何！？」

「なんか妙な感じがしねえか？」

「……そうか！？」

見た目とは裏腹に、数えきれない修羅場をくぐってきたリボーンの獣の感が、これから起こるだろう？異変？を感じ取っていた。

「…なんか嫌な感じだ…。おい、ツナ！お前は守護者を地下の稽古場に集合させる！いいな！？」

そう言い、リボーンはシュシュッと、最早黒い線にしか見えない速度でどこかに走って行ってしまったのだった。

リボーンの読みがまさかこの時は当たるとは綱吉が持つ『超直感』

ですら、読み取れることが出来なかったのだ……。

ツナは仕方なく守護者を探しに向かった。この場合、モタモタしたら鉛玉か、手榴弾を投げ付けられるかもしれない。綱吉の超直感がそう告げていた。まず綱吉が最初に向かった先は……

ガラッ

勢い良く、古風な音を上げながら引き戸を引いた。

「リボーン、遅かったな！……って……ツナじゃねーか！どした！？」

最初の目的者は、通称野球馬鹿と呼ばれる男、山本武だった。綱吉が学校でゆう、底辺のグループなら、武は間違いなくトップグループだろう。この男、運動神経抜群だが勉強がダメとゆうベタなキャラクターかと思いきや、やれば勉強が上位にはいるとゆう男。うらやましい限りだぜこんちくしょう……！

「山本！なんかリボーンが守護者は地下の稽古場に集合って……！」

普通なら、何故、理由は？と聞くもんだがこの山本武は違う。

「わあっただぜ！他の奴らは……！」

元気のいい、爽やかな返事が返ってきた。これがこの男の長所の一つである。

「山本が最初だからまだなんだ」

「そつか！じゃあツナは笹川んとことランボを頼む！俺はその他の守護者を呼び行くからよ」

「わかった！じゃまたあとで！」

そう言い、2人は別れた。

*

一方ソウルソサエティの一護達は……

カキーンッ

金属がこ擦れ合い、火花を散らす。野猿の大鎌と、一護が持つ、身の丈を越える無骨な大剣――【斬月】が離れた。

「くそっ！なんなんだ！？あの武器は！なんか変な炎だしやがって！」

奇妙な技――それだけならまだいい。奇妙であり、^{アブノーマル}異能なのだ。奇妙だけでかたずく敵なら、今までもいた。だがこの野猿とゆう男は、^{ホロウ}霊力でも死神の力でも、虚の力でもない力を。わけのわからない炎を操る。そのせいで、頭は冷静に回らず、混乱の為に動きが鈍る。しかも何故だろう。あの赤い炎に斬月を絡ませると、刃を削り取られるような、柄に巻いてある布がボロボロにされていくような感覚に襲われた。

「くそっ…どうすりゃいいんだ！」

「一護！ここは一旦退くぞ！」

兵法鉾の一つ、いわゆる戦略的撤退だ。未知の敵にこだわり過ぎると、手痛いしっぺ返しが返ってくる。

ルキアは今の状況だとただ殺られると判断して撤退をすることにしたのだ。

「わあった！」

一護も今までの闘いで学んだ為に正しいと感じたのか、ルキアと同じ気持ちらしい。ルキアが謎の駄菓子屋を経営する浦原喜介から譲り受けていた、携帯式の【穿界門】を発動させ、現世と尸魄界を一時的に繋げた。2人が穿界門をくぐり抜けた。

「！？待て！」

野猿が一護達を逃がすまいと追ってきた。

「！？ルキア！追ってきたぜ！？」

「ああ！分かっておる！ひとまず現世にいる恋次達に連絡を…」

正規のルートをくぐり抜けるルキアの頭にある考えが浮かんだ。『何故あの状態で穿界門を潜れる？』野猿から霊力らしき物をまるで感じない。それにこの穿界門には霊子変換機がついていない。野猿が生身で現世に降り立つことは出来ない。勿論、一護は自分の軀を、ルキアは現世に【義骸】を置いてきている。考えてる間に、現世に行き着いた。そして、重大なことに気付く。

「って…ここは空座町ではないぞ!？」

ルキアが驚きの声を上げた。一護達はすっかり逃げるのに気をとられ、今まで気づかなかったのだ。

「ここは一体どこなんだ!？」

戸惑う2人。

「教えてやろう!」

そこに、追い付いた野猿が一護達の前に立ちはだかった。そして、告げた。この町の名を。

「ここは…並盛町だ!」

ここで出会うのだ。

額に死ぬ気の炎を灯す少年と、

死覇装とゆう、黒衣を身に纏う少年が、

出逢い、物語が交ざり合う。

『2ノミシラヌCity』（後書き）

別の町に来ちゃった一護達。じゃあ義骸とかどうすんできと思った方、大丈夫です。仮面3はなんでやねんと思う方法でなんとかします（笑）

『3 / i n t e r t w i n eの始まり』(前書き)

自分の作品と掛け持ちなので、手直しが甘いです。そして短いです。
読んでくださってる皆様方、みい、ごめんなさい。

『3 / i n t e r t w i n e の始まり』

野猿が言った町の名前はやはり一護達を知る空座町ではなかった。

「な…並盛町…だと!？」

ルキアはかなり驚いている様子だ。驚くのも無理はないだろう。空座町に来たはずなのに全く違う町に来てしまったからだ。

「そうだ!ここに…俺が探し求めていた…ボンゴレがいる!お前達にもう用はない!最初は知らない場所に出たときは少々驚いたが、今は並盛町にいる!」

どうやら、野猿自信も何故尸魄界にいたのか分からないらしい。自発的ではなく、偶発的なのか。

「やべーぞ、ルキア!こいつ、やる気だぜ!？」

一、謎の能力使いとの遭遇と戦闘。

二、予期せぬ町に出してしまったこと。

この2つにより、一護達の頭の容量は既に越えていた。
キヤパ

「ああ、分かっている!とにかく、逃げろ!」

ルキアと一護はひとまず逃げる事を優先させた。だが現実には蜜の味を持つ妄想と違い、果てしなく苦い。

「逃がすかよ!」

野猿が動いた。速度はそんなに素早い物ではないが、今の二人の混

乱状態では反応しきれない。そしてその処刑鎌デスサイズの標的は小柄な死神。

「つつ!?!」

——ドオオオオオン…

大鎌から、赤い炎を固めた斬撃波が放たれ、ルキアに襲い掛かった。

「ルキアア——!!!!!!」

一護の声が、見知らない町の空に響いた。

「けっ! 1人しか死ななかつたか! まあいい! 残りのオレンジ色の髪したやろーもさっきの女みたいにしてやる!」

絶望な未来とゆう妄想が一護の頭の中に想像されたその時…。

「誰が死んだって?」

第三者たる、謎の声が割って入ってきた。

「んなっ…お前は!!」

そこには先ほど野猿が放った技を片手で受け止めた…綱吉がいた。但し、ほとんど最低ランクにいちする少年の綱吉ではなく、額にオレンジ色の?死ぬ気の炎?が灯り、手にはボンゴレのエンブレムが入り、死ぬ気の炎を制御・武器としてのコントローハイパーールをする手甲・ガントレット《イクスグローク》を装備した超死ぬ気化した超綱吉がルキアを抱え、宙を飛んでいた。

「！？ルキア！」

一護が驚きと心配の気持ちを織り交ぜた声を上げた。

「ボンゴレエッツ！！」

野猿が憎むべき相手であり、攻撃対象のボンゴレ10代目を発見し
獣如く咆哮を上げた。

「あんな技でよくも倒したと確信したな。野猿。」

「ん な っ … ！ ？ ？ 」

野猿は今のツナの一言に、あまり頭が良いとは言えない頭で簡単に
ぶちギレた。

「おい、オレンジ頭。」

網吉は一護を呼んだ。ここでオレンジ色の頭は一護しかない。

「どいつもこいつも…俺はオレンジじゃねー！！？」

一護は野猿にも目の前にいるツナにもオレンジオレンジと言われて
キレてしまった。ちなみに一護の頭は一卷の頃はたんぽぽ色だった
んだよ！

「たんぽぽでもねえよ！！」

「何を一人で騒いでいるんだ？そして、名前が分からないからそう
呼んだだけだ。とにかくこの女の子を持っていてもらえないか。言
い方が悪いが、戦闘の邪魔になる」

「あ…ああ、すまねー。」

一護はルキアを抱えて数百？先に離れた。

「待たせたな。野猿。」

「うるせー！ボンゴレ！お前はこの野猿が倒す！そして…Y兄貴に認めてもらうー！」

野猿には、一護達の戦闘時にあった余裕はどこにもない。

越えなければならない壁。

認めて欲しい、自分が認めた父性に。

父性とは、越えなければならない絶対的な壁であり、自分を認めさせなければならぬ存在なのだ。

野猿は今、その2つとぶつからなければいけないのだ。

『3 / i n t e r t w i n eの始まり』（後書き）

出会った二大主人公。果たしてこれからどうなるのか。それは、仮面3にもよくわからないとです（涙）

あ、あと次回辺りにオリジナルキャラがでます。みいのオリジナルです。仮面3のもいつかです。てゆうか出します。コレからもご鼻屑に。

『4 / ハイテンションGirl』(前書き)

みいのオリジナルキャラ登場です。

『4 / ハイテンションGirl』

ーカキンッッ

野猿が放った大鎌の一撃を、綱吉はイクスグロブのエンブレム部分でガードした。激しい戦いが繰り広げられていた。だが野猿の戦力はミルフィオーレの、ブラックスペル中では下の下。言い方が悪いが、野猿がゆう？ y 兄貴の腰巾着？にあたる。だからツナが先程から野猿をおしていた。闘いの結果は目に見えている。

一護はいきなり現れた、【ボンゴレ十代目】がさっきから気になっていた。しごく当然だろう。いきなり現れた鎌男、いきなり現れた炎少年。一護の頭はパンク寸前である。

（なんなんだよ…あいつ等は…。なんなんだあの炎…！なんなんだこの町…！なんなんだこの展開…！）

*

その頃戸魄界では…。

「へえwwいつちたち、すごいところにいるねww」

そこには透き通りそうな綺麗な水色の髪をし、頭にピンクのリボンをつけた少女が何かの画面を体育座りの状態で見ながら笑っていた。そこへ1人の老人がやってきた。かなりの年齢だろう。服装は、隊長を表す羽織を着ている。羽織に書かれている、属している隊を表す番号は？ー？

「何をやっている…。」

老人の名は山本元柳斎重國。総隊長をしている。

「えつとね？、いつちいたちがどこにいるのか調べてたのww」

少女はそう言いにつこり微笑んだ。まどっている雰囲気から、とても幼い。だが、見た目から計れる年齢は二十歳前後くらいか。ちなみに掲載した年齢は人間年齢換算をしたものであり、実際はその十倍は生きているものなのだ。尸魄界で生きている者は大概そんな感じである。

「そうか。あやつたちは現世の空座町にいるのじゃろう？」

重國はてつきり一護達は空座町に居ると思っていた。だが少女の答えは予想外のものだった。

「ううんwwそれは違うよwwいつちい達ね？、たしかに現世にはいるけど…空座町じゃないよww」

重國は一瞬それを聞いて止まった。まるで頭の上にてんでんと、点が浮かんだあと、おかしい事実気付いた。

「…なんじゃと？それは真のことなのか？」

重國はありえない答えが返ってきて、少女を疑った。

「やだなあww私がそんなすぐ分かるような嘘をつくと思う？ほらwwこの映像を見てみてww」

とゆうことは、分かりにくい嘘はつくのか。重國は言われたとおり

映像を見てみた。そこには…気を失ったルキアを抱えている一護と、戦っている2人組と空座町ではない知らない町が映し出されていた。

「な…何がおこっているというのじゃ!？」

重國はなぜ一護達が知らない町にいるのかが分からなかった。逆にハヤ●のごとくみたいにな、超人的洞察力があっても困るのだが。だってこれ小説だし。

「即刻に原因をつきとめねば…」

重國は今すぐ現世に向かってくれる隊長を探しに行こうと身を翻した時、少女が元気よく、そして右手を上げながら立ち上がった。まるで授業参観でテンションが上がった子供のように。重國はその少女の行動を見て、顔が少し青くなった。

「ま…まさか…お前が行くというのか？」

恐る恐る疑問に思い聞いてみた。すると少女はにっこりしながら言った。その笑顔が重國の不安の種の一つである。

「うんwwダメかな？」

と言った。

やまじいは一瞬心配そうな顔をしたが、他の隊長を探しに行くのもめんどくさくなり妥協した。いや簡単に妥協するなよ。もっと文章稼げよ。

「…よかるう。じゃが1人では何かと不便じゃろ。誰かもう1人か2人連れて現世へ迎うのじゃぞ?」一段落ついたらこちらへ連絡を

入れるのも忘れずにな。」

まるで初孫が初めてのお使いに行くのを見守るお祖父ちゃんのように、心配と不安を交えながら言った。
少女はまたにっこりと笑って応える。

「了解？wwこの五番隊隊長鈴音真凜、現世へ行って参りますww
」

重國お祖父ちゃんはまだ心配そうだ。読者の皆様方も、この喋り方なら、重國の立場なら、一抹の不安を時速300キロの風圧で感じるだろう。

『4ノハイテンションGirl』（後書き）

はい、オリジナルキャラの鈴音真凜ちゃん登場。喋り方がね、ちょっとアレですけどね、多分活躍すると思います。

キャラクターなどのご教示を、みい共々よろしくお願いします。

『5ノキアラBREAK』（前書き）

今回はみいワールド全壊…いや全開です。

『5 / キャラBREAK』

真凜は現世に行くために、重國に言われたとおりに現世に一緒に行ってくれる人物を探していた。

「誰にしようかな？ww」

真凜は誰にしようか悩んでいると、とゆうか本当に悩んでいるのか、
と思ってしまう。喋り方がコレだから。

「あれ？真凜隊長じゃないっすか！どうしたんすか？」

声がしたほうを向いたらそこには高身長、赤髪で刺青が顔や体にある六番隊副隊長阿散井恋次が立っていた。

「恋次じゃんwwえつとね、現世に行くミッションができて、
一緒に行く人を探し歩いてるとこだよww」

真凜がにつこりしながら言った。この少女は本当によく笑う。すると恋次が言った。

「その…俺じゃダメっすか？」

恋次が真面目な顔で真凜に向かって言った。でも何故だろ。真剣な表情の仮面ベルソナの下に、下心の表情があるような…。

「恋次来てくれるの？ありがとう」もちろんオーケーだよww」

それを聞いた恋次は。

「よっしゃ?!?!?!(喜)」

と叫び、ガッツポーズをした。見事なキャラブレイク。原作ファンの皆様、ごめんなさい。

「クスッ」恋次そんなに現世に行きたかったのww?」

真凜はてつきり恋次がただ単に現世に行けるから喜んだと思った。だが恋次は真凜が予想もなかったことを口にした。

「いえ！俺は現世に行けるから喜んだんじゃないんです。真凜隊長が行くから…／／／／(恥)」

本当に見事なキャラブレイク。いや、もうブレイク通り越してクラッシュである。賢明な読者の皆様なら分かるだろう。そう、恋次は真凜を好いているのだ。だが真凜は有りがちな鈍感で天然属性の為…

「恋次…そんなに私のこと…心配してくれるなんて…まるで…お父さんみたいねww」クスッ」

重國がお爺ちゃんなら、恋次は父親か。真凜がお父さんみたいと言ったので、恋次は複雑な気持ちで苦笑いした。

「だけどね、恋次。現世へ行くためには恋次の他にもう1人人材がほしいの。もう1人誰がいい?」

真凜はにつこりしながら恋次に聞いた。

恋次は真凜の笑顔にもう内心やばい状況だったが、冷静を装い……しかし瞳孔が開きそうなほど眼を見開いていたらばれそうな物だが、

そこはばれない。だって小説だもん。

「えつとですね／＼、ま…真凛隊長が決めた人物ならお…俺は認めます／＼！！」

しどろもどろ恋次は真凛に言った。

「そっかｗｗじゃあ、恋次だけでいいやｗｗ」

真凛はもう１人探すのはめんどくさいと思ったので、恋次だけでいいと思った。おいおい面倒くさがんなよ（若本風）。だが恋次は真凛の発言を。

『ま…真凛隊長が…俺だけを？も…もしや！！真凛隊長も俺の事を好きなんじゃない？／＼／＼』

と解釈していた。何ともない思春期男子のような悲しい脳内構造である。ギャルゲーじゃないからあり得ないちゅうの（若本風）。

「は…はい！！真凛隊長／＼／＼」

もう恋次は真凛にメロメロだ。今までの恋次のクールな一面はいずこへ？とか考えてはいけない。断じて。

「よし、恋次ｗｗ♪行くよｗｗ」

真凛は早く現世へ行きたくて仕方のないようだ。何故かというと、真凛は強い奴は男女関係なく好きで、早く敵と戦いたくてうずうずしているからだ。けんぱつつあん、もしくはド・ゴンボールの悟・

ですか？

理由はもうひとつあり、早く現世へ行きショッピングしたいからだ。現世はソウルソサエティより物価が安く、可愛いものがたくさんあるからだ。今どきの女子高生ですかコノヤロー。

「分かりました！！真凜隊長！！！！」

キラクラッシャー恋次とバトルマニア女子高生の真凜はそれぞれの思いを頭の中に浮かべて現世へ向かったのだった。

『5/キアラBREAK』(後書き)

原作ファンの皆様、すいやせんしたあああああああ！！！！

『6ノデストロイBOY』（前書き）

久しぶりの更新です。今回、仮面3がぶっこわれている為色々と変です。

『6 / デストロイBOY』

ドオーン・・・

数分間の死合いの終わりを告げるように、町の空で爆音が鳴り響く。

（…決着がついたのか…？勝ったのは…どっちだ…）

一護はルキアを抱えて遠くのほうで乱闘を見ていたため、どちらが勝ったか分からなかった。更に爆発により生まれた爆煙のせいでより視界が悪い。

（煙が…晴れていく…）

煙の中を立っていた人物は…

（！？嘘だろ…何であいつが！？）

そう。一護の予想を反して立っていたのは野猿、つまり敵のほうだった。

だが…

野猿はゆっくり落下していき、地面に叩きつけられたのだった。

（！良かった…敵が負けて…）

今までの疲れ、混乱が一気に一護を襲ったのか、そのまま気を失い、ルキアを腕に抱えた状態で地面に向かって落下していった。

ドサツッ…

地面に躰がぶつかる前に、綱吉が空中で旋回し一護達をキャッチする。

「やれやれ。オレンジの男は気を失って欲しくはなかったのだから。」

綱吉はため息を吐き出し、2人を抱えたままアジトに戻るのだった。一方、尸魄界の真凜達というところ…

*

「う？ん…」

真凜は一護達の前に出ようと思っていたが、真凜の計算ミスで全然見知らぬ所に出てしまった。

「真凜隊長！！これから…どちらに向かいますか？」

恋次は真凜にメロメロだったが、やっといつもの冷静さを取り戻していた。とゆうか、好きな人がいて冷静さを失うって、ベタな恋愛アニメの主人公か、昭和の少女漫画ですかコノヤロ！。

「そうだなあ？…とりあえず、一護の霊圧を探そうww」

真凜が一護の霊圧を探し始めた。しかし…

「…だめだあ…。一護の霊圧が全く読み取れないよ？…。」

諦めんなよ！！妨害か何か、真凜の能力が低いのか、何故かは分からないが、真凜は一護の霊圧を読み取ることができなかった。

「仕方ないなあ？……こうなったら……探るかww」

真凜はにつこりしながら恋次に向かって言った。

（ドキッ…ま…真凜隊長…そ、その笑顔は…反則っす…／／／／）

冷静になったんじゃないかねえのかよ。恋次は真凜の笑顔に負け、心の中はパニック状態だった。なので、真凜に話しかけられたのも忘れていた。

「ん？恋次…顔赤いけど大丈夫！？熱でもあるの？」

恋次の心の中など知らぬ真凜は恋次のおでこに自分のおでこをコツン。……あれ、身長さは？

「んなっ…／／／（照）」

（幸せだあ…（照））

恋次は幸せすぎて気絶。無理もない。好きな子におでこコツンとか幸せすぎですね（照）……いや、みいよ。それは小説でもあんまり無いぞ。

「恋次！？大丈夫！？」

そんな事情を知らない真凜は恋次を揺さぶった。が、恋次はなおもまだ気絶中。

「しょうがないな（汗）誰か尸魄界から呼ぶしか方法はないなあ（汗）」

真凜一人では恋次をかついで一護を探すのは無理だ。身長さもあるしね。

「誰を呼ぼうかな」

真凜が考えていると、背後に人の気配を感じた。

「！？誰！？」

真凜は後ろを向いた。そこには…赤い炎をともした子猫が肩に乗っていて、手にはドクロの形の武器らしきものを装着したなんかデストロイな人間が立っていた。絶対警察に見つかったら捕まるだろう。

「あなたは…どちらさまですか？」

こんなときでものんきでいられる真凜を尊敬してます。このみいが（笑）仮面3は尊敬出来ませんけど。

「…てめえこそ誰だ…」

デストロイ男が答えた。いやそもそも、質問を質問で返すのは答えていることになっているのか？

「私？」私は…」

と真凜がいかけた時、

「いや……てめえが誰であろうと関係ねえ……。てめえはボンゴレの者じゃなさそうだ……。つまり……てめえは敵っっ！！」

話を聞こうよデストロイ男。

『6ノデストロイBOY』（後書き）

出ましたね～。いわゆる危ない人。現実では会いたくないデスよね（笑）

（PR）

この作品の原作者みいが、1人で作った二次創作作品、『アリスインアナザーワールド』が公開中です。まあ1人と言っても、武器アイディア等には自分も関わっていますがねえ。初心者が作っている作品ですが、どうか見てやってください。感想などを書いてやってくれると嬉しいです。どうかよろしく願います。ついでに仮面3の作品もよろしく願います。

『7 / BATTLEハトツゼン』 (前書き)

遅めのあけおめ！そしてお久しぶりですみい+仮面3でっす。
いやー、本当にお久しぶりです。

そして今回は時間をかけたわりに……短いです。すいません……。

『7 / BATTLEハトッゼン』

ドオオオン…

男は手についているドクロの形の武器らしきものから赤い炎の攻撃が放たれた。その炎は矢の様に、弾丸の様にもとらえられる形状だ。その炎の矢は真凛に一直線に、炎塵を撒き散らしながら進み、直撃した。

「けっ。いくら女でもあっけなかったな。」

この男はてつきり真凛が死んだと思っていた。しかしこの男、分かる人には分かるだろうがいつもはこんな軽率な真似はしない。そもそも、綱吉しかり、この男しかり魂魄であり死神でもある一護が？何故見えている？？この二つの謎成分が強い。

敵を一撃で葬った事に、優越感を得たのか男は口元を歪める。だが、世の中そう上手くできていない。

「ケホッ、もう…せっかく現世来る前に髪の毛セットしてきたのに…だいなしじゃ？ん（泣）」

「んなっ！？ば、馬鹿な！！生きているだと！？」

そう、なんと真凛は生きていました。…何故？当然だまがりなりにもこの少女、隊長格である。『断空』なり障壁を出現させる鬼道の一つや二つ使えて当然だ。

「てめえ…生きてやがったか。」

「あつたりまえじゃーん」あんなんで死んでたら隊長やってないし
。」

男はカチンときた。なぜなら、真凜は男の技をあんなんど表現していたからだ。この男は自信家であり、プライドが高いようだ。

「つてめえ…！」

マジギレ！？マジギレしちゃったよ（笑） by みい

乳酸菌とつてるう？（笑） by 仮面3

話がズレ過ぎた……。そんなことも知らない真凜はというと…

「うちの技をみせたげる」さっきからうちの斬魄刀がウズウズしてるし」

真凜は戦闘体制になった。この話からして、こんなんでも一応斬魄刀との対話ができるらしい。そして斬魄刀は好戦的だと想像できる。

「上等だ、女！…てめえの力をみてやる…！」

男も戦闘体制になった。

「よーし、いつくよー」

と、真凜が始解をしようとしたその時…。てゆうかおかしいと思えよお前等！見えちゃってるんだよパンピーに！見え過ぎちゃって困

るレベルだよコレ!!

また話ズレた……。

真凜の行動を遮る様に大声が上がった。

「【狒骨大砲】おおおお——!!」

いままで空気だった赤髪男の声の後、髑髏男めがけ薄紅色をした巨光弾が撃ちだされた。

技は男めがけて一直線に、アスファルトの地面をえぐりながら進んだ。

ドオオオオーンッ

真凜はこの技を放ったであろう男の元へ。そして心の中でツツコンだ。

『簡単に？アレ？使っちゃったっぽいけど…流石にまズくない？』

ですよ。？アレ？とは、死神として頂点を極めた者のみに許される斬魄刀戦術の最終奥義。それを発現できた者は一つの例外も無く尸魄界の歴史に永遠にその名を刻まれるとゆう大層なアレである。

勿論そんな物をホイホイ使ったら、総隊長にアレをアレして、アレをガツンとやれるのである。

『7 / BATTLEハトツゼン』(後書き)

後書きでもどうも仮面3です。ここまで見てくれた読者様の「みじっか……！！！！！！！！！！」とゆうお声が聞こえてきそうです。すいません……もとい、ごめんなさい。

感想、質問等を受け付けています。ユーザーの方も、そうでない人もウエルカム！ 質問とか沢山きたらミニコーナーもできますしね。

……は？『文章稼ぎ』？……ちよ、ちげえーよ！そんな
じゃねえよ！でもそうゆうの待ってまああああああす
う！！！！！！

『8 / 異変を告げる白衣』（前書き）

サブタイトルの書き方変えました。

『8 / 異変を告げる白衣』

真凜達の場面から変わり、ボンゴレ10代目こと沢田綱吉に助けられた一護達に視点を戻す。

＊

とある部屋。部屋は和風作りになっており屏風や襖等がある。中心には布団が2つ並んで敷いている。布団があるとゆう事は勿論人も寝ている。一つにはルキアが寝かされている。布団の脇にはルキアの斬魄刀である『袖白雪』が置かれている。そしてもう一つには我等が主人公の1人である――。

「め…明太子!？」

黒崎一護が変な一言で飛び起きた。悪夢でも見ていたのか、顔には嫌な汗を掻いている。明太子で起きる悪夢っていったい何なのだろう。

「――はあ!はあ…はあ…夢か…、なんつつ寝起きだよ…」

手の甲で額の汗を拭う。直後、見知らぬ部屋に硬直した。急いで辺りを確認する。まずは隣にいたルキア、特に外傷は無い。次に布団の脇にある相棒『斬月』を発見すると安堵の息を吐く。

「…確かロン毛のチビに絡まれて…しらねえ町に来ちゃって…茶髪のコから火だしてるガキに助けられて……それで…俺は…気絶

してたのか……？」

額に手をあて、記憶を絞りだす。すると何者かが近づく気配を感じ取り斬月に手を掛ける。片膝立ちになりいつでも対処できるような姿勢になる。寝起きだとゆうのに、ここまで神経が磨ぎ澄まされているとは、流石としか言えない。そして扉が開いた。和室と言っても扉は普通のドアだった。ドアが開いた。

「あ！眼覚ましたんだ」

部屋に入って来たのは一護達を救った綱吉とリボン、そして山本武と仲間に芝生頭と馬鹿にされている並盛中ボクシング部主将、笹川了平だった。武が一護の構えに驚いた様子をとる。

「おっと、そんな風に構えるなよ。何もするきねーんだからさ」

それに了平が続いた。

「だが思ったより元気そうで極限に良かったぞ！」

「あ……ああ……」

一護が少々戸惑いながら応えた。リボンが一護と斬月を一通り観察した後口を開いた。

「なるほど…確かに格好もだが、武器もおかしいな」

「なっ！？」

ポカーンとした表情になり、思わず斬月を落としかけた。

「おつと悪いな。なにもお前の愛刀を馬鹿にした訳じゃない。ただな、この世界に存在する力……死ぬ気の炎とは全く違う力の塊のその刀に驚いたただけだ」

流星はマフィア界最強の赤ん坊アルコバレーノと言われる者の1人だ。自分の命を脅かすかも知れない力に敏感だ。だが一護の驚いたポイントはそこじゃなかった。

「いやそつちじゃねえよ！なんで赤ん坊が喋ってんだあ！？」

「ああそつか、そりゃ驚くよね。こいつは——」

ガスウンツツツ！！

直後、綱吉の顎をリボーンの小さい爪先が捕えた。リボーンの身長から綱吉の顎までかなり距離があったが難なくリボーンは跳んだ。

「アビツ！？」

「家庭教師に向かってこいつとはなんだこいつとは？」

啞然とする一護に苦笑いしながら、顎を擦り自分達の説明をする綱吉だった。

——数分後。

「……………つまり、お前等はマフィアで、そしてお前達10年バズー

かつ武器で自分達の時代から10年後に来ちまって、今は別のマフィアと闘ってる……って訳か？」

リボーンとの出逢い。自分がマフィアのボス候補だと教えられた時の衝撃。そしてボスとしての責任。今までの闘いを全て話した。今は一護も斬月を置き、全員座っている。

「はあ……信じ難いが、現実だもんなあ。つか中学生でマフィアとか物騒すぎるだろ」

「はは……、俺も最初はそう思ってたよ」

因みに武は未だマフィア？ごっこ？だと思っている。武が『ごっこだけどな』と言い掛けると、リボーンが手で止めた。 magari なりに
もリボーンは武の剣の師。剣士にとって師の命令は絶対である。武も急いで口を閉じた。

「俺達の事を話したんだ。お前も話してくれないか？」

リボーンが一護の説明を促す。

「ああいいぜ。俺は死神代行、黒崎一護——」

——更に数分後。

黒崎一護が死神としての力を手に入れた時、そのトリガーとなったルキアとの出逢い。虚との闘い。斬月との対話、心からの和解。そして様々な死神、虚、破面との闘いを話した。そもそも、赤の他人

である綱吉達にこんな話をする義理はないが、救けてもらっているし、相手が話したとゆうのに自分が喋らないとゆうのはばつがわるい。

「死神…虚…破面…そしてその斬魄刀か」

「うむ、まるで少年漫画だな！」

「先輩、だったら俺達も同じ様なもんすよ」

「でも相手が人間じゃない分そっちの方が大変そうだなね…」

綱吉達の敵も十分人間離れていると思うが。まあ、綱吉がびびっているのは一護達の敵が虚（幽霊）だからだろう。

「しかし、一護がここに来た理由。そして何故魂魄である一護達が俺達に見えているのか、気になるな」

確かに今の一護は肉体に入っていないし、ルキアに関しても義骸に入っていない今、本来リボン達に見える筈無いのだ。

「あれじゃねえか？ お前等の死ぬ気炎とかで、第六感が……」

「死ぬ気弾や、死ぬ気炎にそんな効果は無いよ。いや、見える道具はあるがそれは少し先の未来にある」

「なるほどな…。ん？ 今言つたの誰だ？」

今の声色はこのメンバーの者ではない事に気付いた一護。

「あれ…確かに……」

「俺じゃないぜ」

ただ今のは武。

「おおお、俺でも無いよ!」

なんかこんな怪談話あったなあ……、と思い出しビビる綱吉。

「俺でもねえしな……」

一護では無いのは当たり前だが。

「俺は分かるぞ」

リボーンが言いながら人差し指を立てた。そして指を差したのは、この場で違う発言をしていない笹川了平だった。

「隠す気がもともとないみてーだな。最初からバレバレだったぞ」

すると、了平は『アハハ』と極限に爽やかに笑った。その爽やかさに、ボンゴレ組は度肝を抜かれた。ボンゴレ組の記憶では、この男は熱血に暑苦しく笑うがこのように笑うとは考えられない。

「アハハ、流石だねリボーン君。まあ確かに隠すつもりは無かったけど…ちよつとしたお遊びさ。似てたでしょう?」

「どうでもいい。本物（了平）はどこだ?」

「アララ…冷たいね。安心して、笹川了平君にはちよつと眠つてもらってるよ。今は『極限お相撲大会』の夢でも見てるんじゃないかな?」

「それがお前の能力か?」

「ちよつと違うね。僕の能力はこの変身能力――」

言葉を進めると同時進行で、了平の軀に、鏡の様にヒビが入り砕ける。

「超換トリックともう一つ…まあこれは後でいいかな? まずは自己紹介。僕の名前は柏木真喜かしわきまき。よろしく」

現われたのは長い白髪を一つにまとめ、白衣を着た青年だった。

「な…!」

一護、綱吉、武の表情が凍り付いた。

「君達の前に現れた理由は、今起こっている異変について教えるのだよ」

「異変?」

「そう。生身の人間が何故尸魂界に現われたか、何故君たち死神がここに来てしまったか、何故死神が見えるのか、これは立派な異変だ」

「何故お前が知っている」

「死神が魂の調節者なら、僕は全世界と時間の調整者だから…この異変しらなくてどうする？」

不適に笑うと、真喜は癖なのか眼と眼の間を人差し指でかいた。

『8 / 異変を告げる白衣』（後書き）

柏木 真喜

21歳 / 男

能力：トリック超換

自身や指定した物を変身させる能力。

仮面3考案のオリジナルキャラです。能力はもう一つありますが、今は出しません。そのうち使います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643p/>

炎を灯す少年と黒衣を身に纏う少年

2011年11月13日20時07分発行